

# 72 期リレーエッセイ

## 置かれた場所と真実の花

会員 笹本 花生



私が小学生の時、父が初めて本を執筆した。初版のうちの一冊を「花生へはメッセージ付きだよ」と渡され、ドキドキしながら表紙をそっとめくると、父の几帳面な字で、「随所作主 立処皆真」と書かれていた。父によると、これは、臨済宗の開祖である臨済禅師の教えとして『臨済録』に遺された言葉であり、置かれた場所で主体性をもって一所懸命にやるならば、どこであってもそれは真実である、という意味らしい。小学生の私にはいまいちピンと来なかったが、今になってこの言葉の奥深さを感じるところである。

「置かれた場所で咲きなさい」というのは渡辺和子シスターが生前繰り返し仰った言葉であり、渡辺シスターはこの言葉をタイトルにした書籍も出版された（幻冬舎、2012年）。私の父は、渡辺シスターのこの言葉が大好きであり、私が大学に合格した際も、「置かれた場所でめいっぱい咲きなさい」と言って送り出してくれた。先の「随所作主 立処皆真」という言葉と「置かれた場所で咲きなさい」という言葉は、自分が置かれた場所で精一杯努力することに真実を見いだすという点で共通している。

その後、父は病気になり、病床から家族に宛ててビデオメッセージを遺した。そのなかで父は、「私は、置かれた場所のちょっと先で咲こうといつも思っていた」と語った。先の臨済禅師や渡辺シスターの言葉を生涯大切にしていた父が、最期に選んだのがこのメッセージであった。ビデオを収録した3日後、父は天国へと旅立っていった。父が、「置かれた場所」ではなく、「置かれた場所のちょっと先」で咲こうと

思ったのは何故だったのだろうか。私は、弁護士一年目を駆け抜けながら、遺されたメッセージの意味を考えていた。

父は常々、「自分ひとりが幸せになっても何も意味が無い。みんなが幸せになる方法を考えろ」と言っていた。私は、この言葉が「置かれた場所のちょっと先で咲きたい」という言葉とリンクしているように思う。

「置かれた場所」で目の前の与えられた使命に向き合って最善を尽くすのが第一段階。そのうち、より広い視野をもって「置かれた場所のちょっと先」を考える第二段階がくるのかもしれない。それでは、やり尽くして「咲く」とはどのような意味だろうか。能を大成した世阿弥は、『風姿花伝』の中で「時分の花をまことの花と知る心が、真実の花になほ遠ざかる心なり。ただ、人ごとに、この時分の花に迷ひて、やがて花の失するをも知らず」と書いた。「時分の花」である一瞬の功績に慢心することなく、「真実の花」を咲かせられるまで、じっくりやり尽くすことが重要であるようだ。臨済禅師は「立処皆真」といったが、それは「随所作主」が前提である。やり尽くさない限り、真実の花は咲かない。そしてやり尽くして初めて、「置かれた場所のちょっと先」が見えるのかもしれない。

今の私はどのように咲こうとしているだろうか。咲く場所は合っているのだろうか。ちょっと先には何があるのだろうか。そんなことを考えながら、しかしいくら考えても答えは分からない。今の私はひとまず、今置かれている場所で精一杯やり尽くし、ここで真実の花を咲かせられるよう頑張るのみである。